

バカと嫌われと元ニート

Argo

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

バカテス×カゲプロ！

嫌われ要素あり。明久×優子

伸太郎×貴音（伸貴）要素あり。

中学校で嫌われてボロボロになった明久を救ったのは赤と青のジャージを着たヒーローでした——

目次

ばかにーと 設定	1
中学生編	
ぷろろーぐ	7
眠りから《覚める》	12
信頼の証	17
はいすぺっく!	22
来客《壺》	28
『目を背けたくなる話』	31
『ジャージのヒーロー』	39
『しんたろうのはなし I』	46

ばかにーと 設定

如月伸太郎 (22) episode / zero

カゲロウデイズ攻略後の世界。

最後の周回でシントローは嵌められてー模武藻分子ーメカクシ団ではエネとモモを除く皆に嫌われた。シントローはメカクシ団に失望する。

過去の決別の意味を込め、シントローではなく伸太郎として人生を歩むことを決意。

貴音ことはカゲロウデイズ開始寸前の高校生時代から好きだった。引きこもるキツカケは貴音がいなくなってしまったから。親友も人生初の同性の友人も好きな人さえ居なくなり絶望して、家に籠るように。

ただ家に居るだけなのも女手一つでここまで育ててくれた母に申し訳が立たないので、株やイラスト、ハッキングや楽曲製作をして、家計を支える。

自殺を図るが死ねなかった経験がある。

桃はその事ー世界に絶望しながらも家族の為に活動してきてくれたことーを知っているのでシントローが嵌められても騙されることはなかった。

貴音と同一年になれて密かに喜んでいる。

貴音を護るために運動も本気で取り組んだため圧倒的チートになった。資格は一時期暇だったので役に立ちそうなものを片っ端から取っていった。

今世では貴音と幼馴染みで、中一の夏告白を決行。見事くつつき昨年結婚した。

黒シントロー時代に培った経験を元に稼いでいるので経済力に問題は一切なしのイケニート・・・いや、働いてるただのイケメンか。隠れシスコン (ボソツ)

現在、立派な一軒家に貴音と住んでいる。

懐にいった人間は全力でサポートする。

天使です！可愛いけどカッコいい。神。

「アイツの苦しみをその目に焼き付けろ」

焼き付ける蛇達が何故かそのまま今世もついてきたことに困惑したのは別の話。

如月貴音（旧姓：榎本（22））

最後の周回でシンタローが嵌められた時、信じないメカクシ団に失望した。

今は体も戻ったので貴音と呼ばれている。

実は伸太郎のことは《ヘッドフォン・アクター》で対戦したときから気になっていた。最初こそ口の悪い生意気なガキだと思っていたが、少しずつ接するうちに彼の過去や不器用な優しき。たまに見せる笑顔や持病持ちの自分を気遣いすぎずに気にかけてくれるところに好意を抱き、伸太郎が好きになった。

ケンジロウに薬を盛られ、倒れたとき、思い浮かんだのは《また、アイツが1人になってしまおう（アヤノと遙が亡くなったことを夏期講習に出ていて知っていた）》ということと《私は伸太郎が好きだったんだ》という遅すぎる自覚だった。

エネとしてシンタローの元へ訪れたとき、シンタローの状態を知り、フォルダの奥で泣いた。シンタローと過ごしながらシンタローが自分を好きだったと知り悶絶。たまにパソコン作業中にシンタローが寝落ちすると寝顔を堪能したり、《ごめんね》《好きだよ》と声を掛ける。なお、シンタローはそれを知っていた模様。

今世で伸太郎と幼馴染みで、同い年であることに大喜びした。伸太郎が勉強を見てくれたので学力に問題はない。持病も伸太郎が居てくれるから気にせず活動できている。

中1の時に伸太郎に告白されて嬉しすぎて泣いた。以来、リア充。昨年結婚した。

仕事はプロゲーマー。主にシューティングゲームがメイン。毎日を伸太郎と楽しく過ごしている。

「伸太郎は明久達を気に入ってる、明久を傷つけたアンタ達に容赦はしないわよ。覚悟してなさい。もちろん、私も怒ってるわよ」

エネの名残で時々テンションが高くなる。

覚めるが何故か残ってて驚いている。しかし、覚めるの影響か持病が軽くなってきたのでそこまで気にしていない。

如月桃（20）

最後の周回の時に兄を信じないメカクシ団に失望した。今もアイドルをしている。貴音がエネの時から二人の想いを知っていた。くっついて大喜びしたうちの1人。

貴音を実の姉のように慕っている。兄は言わずもがな。そのうち、兄が作った曲を歌いたいと思っている。重度のブラコン。

カゲロウデイズが終わり、父が亡くなる前から生活が再スタートしたため、伸太郎が丁度良いからと学力を一から鍛え直した。お陰で学年平均の上を常にキープできた。

最近、伸太郎と共にTV出演出来て喜んだ。SNSで伸太郎が誉められる度に鼻を高くしている。

味覚とセンスはどう足掻いてもそのまま、おしるこーらを美味しいと言って飲んだり、阿吽パーカーを愛用している。幸いと言うべきか、伸太郎の懸命な説得により、他人のご飯を作るときは普通のものを作ってくれる。良心的な殺人料理人。

服については諦めた。

「私は私と私の大切なものを信じてくれる人さえいればそれでいいよ」

奪うが残っていて困惑したが、持ち前の樂觀さで気にしていない。能力は兄の特訓の元もう完全に制御できている。

吉井明久（15）

中学生の時に、嵌められて信じていた人たちから暴力を受ける。優子以外の皆が敵に周り絶望した。明久は気付いていなかったが、中学教諭は全員明久の味方だった。親と玲はもちろん明久の味方。

与えられた優しさは親切で返し、与えられた暴力は力で返す。何も知らない人には、あんな目に合つても基本的に人に親切。しかし、完全に信じている人以外だときこちなくなる。笑うことも少なくなつた。

嵌められる前から優子に好意を抱いていたが、嵌められてからも自分を信じ続けてくれた優子が好きだと自覚した。文月への合格が決まったとき優子に告白。即okで結ばれた。

伸太郎と貴音のことは兄さん、貴音のことは姉さんと呼び慕っている。桃は桃さん呼び。

中学は途中から不登校になるも、伸太郎や貴音に勉強を教えてもらい、学力が落ちる処か急上昇した。護身術として伸太郎に体術を教えてもらったりした。

伸太郎の次に料理が上手い。得意料理はパエリア。

「変わったって君らは言うけど僕がこうなつたのは君らのせいだ。それなのに前に戻れなんて都合が良すぎると思わない？」

隠すの力を少しだけ貰った。厄介事に巻き込まれたら遠慮せず使つていいと伸太郎に言われている。蛇自体が憑いているわけではないので軽く認識が出来なくなる程度だが、一般人相手なら十分。

木下優子（15）

明久と同中だった。中3にあの事件が起こり、周囲の人間に失望する。あんなところにいられないと学校も不登校になる。

明久と同じように伸太郎から勉強を教わる。同時に護身術も学んだ。

伸太郎達のことをお兄ちゃん、お姉ちゃんと呼び慕っている。桃は桃さん呼び。

合格発表の時、告白されて即okを返して明久に抱きついた。明久が自分を優しい目で見てくれて嬉しい。嵌められる前にも明久に何度か助けてもらっていて明久の優しさを知っていたから騙されることも無かった。

「彼の優しさを理解できない、しようもしないアンタ達の言い分を

あたしが理解しなきゃいけない義務が何処に在るわけ？」

明久と同じく、隠すの力を少しだけ貰った。

能力の大きさも同じくらいだけど、明久と一緒に発動すれば全く認識出来なくなるくらいの効果がでる。

木下秀吉（15）

優子の双子の弟、明久を信じなかった人間に対して失望した。失望した相手には氷のように冷たい。学校には一応行っていたが、屋上等でサボっていた。勉強は伸太郎達に教えて貰っていて屋上にいる間は伸太郎が作ったテキストを行っていた。教師はこれを黙認。

伸太郎が教えたため、学力に問題なし。護身術も軽く学んだ。

演劇練習も伸太郎の家に防音の部屋（音楽活動に必要なだった）があるためそこでしていた。たまに桃が来てアドバイスもくれたので桃のことを師匠と呼んでいる。

伸太郎達のこととは兄上、姉上と呼び慕っている。実の兄弟のように接してくれる彼らが明久達と同じくらい大切。

明久と優子の関係を心から祝った。兄弟が増えるのう、と本人は満足。

「あやつを信じない主らをワシが信じるわけ無かろう。寝言は寝て言うことじゃな」

伸太郎から欺くの力を少しだけ貰った。変なのに絡まれたときや明久達を助けたいときに君の演技力を用いて使いなさい。と言われている。

カゲロウデイズは絶望したシンタローがエネと桃と協力してオワラセタ。シンタローの能力《焼き付ける》と元々のシンタロー自身の頭の良さをフルに活かした。

シンタローがアザミに協力を求め、アザミもそれに応え、シンタローの身に全ての蛇を集める。シンタローは今までの経験（記憶）を基に蛇を統率、制御する。

現実世界と重なっている《カゲロウデイズ》のみを上手く削除し、能力の暴走が始まる以前の現実世界をロードした。だが、それは完璧ではなかった―若干の不具合が起こった―ので、セカイに誤差が生まれた。

例）伸太郎と貴音が同じ年であること。

カゲロウデイズに巻き込まれた面々―如月父、その他e t c.―は普通に生きている。カゲロウデイズ自体を消したのでそれに伴い起こった事象も削除した。（カゲロウデイズ被害者の死亡理由が冴える蛇が誘導して起こったと設定します）

カゲロウデイズ中の記憶は伸太郎、貴音、桃、薊は当たり前のように覚えている。他の面々はごく断片的にしか記憶がない。穴だらけの記憶を組み合わせ、彼らは自らの過ちに気付くことは出来るのだろうか？そしてその罪を受け入れる事が出来るだろうか？

無知は罪ではない、だが、知ろうとしないのならばそれは罪へとなり得る。

中学生編

ぷろろろーぐ

それは買い出しの帰りのことだった。あの日から一緒に過ごしている貴音と雑談しながら帰路を辿る。何の変哲もない日常の一幕をその出来事は容易く非日常へと変えた。

『——て！よー君！だれー、たーけて！』

「ん？」

「どしたの？伸太郎」

「いや、今なんか聞こえたような……」

伸太郎は気のせいかと思っただが、歩を進めるほど少しずつ声が大きくなる。

『助けて！誰か……！このままじゃ、彼が死んじやうつ……！！』

「っ……！！」

ちよつとした路地に差し掛かったとき、今度こそ確実にその声は聞こえた。

悲痛なその声をあの事件を経験した二人が無視出来る筈も無かった。買い物袋を固く握りしめて、二人は声が聞こえてくる方へ夢中で走った。

角を曲がり、路地に入って少し走るとその声の持ち主の少女はいた。赤い何かで汚れ、気を失っている茶髪の少年と共に。

「大丈夫（か）!？」

「っ！」

ビクリと肩を震わせて少女はこちらへ振り返る。見知らぬ人間の登場に驚いていた少女はすぐに我に返り、二人に助けを求めた。

「た、助けて下さい！」

「分かった。これ、持ってきてくれるか？」

伸太郎は何も聞かずに買い物袋を少女に渡して、少年を背負う。貴音も何やらスマホを操作している。

「急ごう！見た感じ、出血が激しい！幸い俺達の家はすぐそこだ。それまで耐えてくれ」

「伸太郎は医師まがいのことしてるからきつとどうにかなるわ」

出来るだけ揺らさないようにしながら早足で家へ帰る。貴音は少女を少しでも安心させようと声をかける。

（絶対に助けてみせる！）

真っ赤なヒーローとその相棒はいつかの自分達と似ている二人を助ける為に走った。

幸か不幸か、伸太郎達の自宅に到着するまで、誰ともすれ違うことは無かった。

？――？――？――？――？――？――

結果から言えば少年は助かった。伸太郎の適切な処置のお陰で。伸太郎が処置をしている間、貴音は予めスマホ予約で沸かしていた風呂を少女に貸した。

彼女や彼女の服が少年の血で汚れていたためだ。二人の制服は泥や血で汚れていてとても着れるようなものではなかったので、貴音と伸太郎の服を貸している。

「さて、遅くなったが自己紹介といこうか。

俺は如月伸太郎、歳は22だ。」

「如月貴音、伸太郎の妻よ。歳は22。両方如月でややこしいから、あたし達のことには下の名前で呼んでちょうだい。」

「あたしは、木下優子です……。それで、傷だらけの彼が吉井明久君です……」

目を覚ます気配を見せない彼……。明久の周りに椅子を置いて3人は自己紹介をする。

ちなみに、明久は客室に運ばれた。

「とりあえず、彼の状態だが暫く安静にする必要がある。彼のご親族はこの怪我に関する事を把握しているのか？」

「恐らく、把握してないと思います。前に彼は『両親と姉さんは海外で

暮らしていて、僕は一人暮らしなんだ。』と言っていました。

彼が連絡しない限り情報は届かないかと」

「そうか・・・」

(それなら、あの時よりはまだマシか・・・?)

いや、でも——)

「あ、あの・・・」

「ん?なんだ?」

優子が伸太郎に声をかける。伸太郎は考えるのを一旦止めて、下へ向けていた顔を優子の方へ戻す。

「どうして、ここまでしてくれるんですか?見ず知らずの、それも一目で厄介事だとわかるような人を。」

その質問も最もだった。優子の言う通り普通の人ならば避けるだろう。自分は巻き込まれたくないから、同じ目に遭いたくないから。面倒くさいから、理由は様々だ。

それでも、伸太郎達が無視しなかったのは・・・。

「・・・お前らが俺達に似てた、だから無視できなかつた」

「似てた・・・?」

優子は首を傾げる。あの短時間で見付かるような共通点なんてあつたのだろうか?

「ああ・・・。随分昔の話になるけどな。俺達はサークルみたいなモノに入ってたんだ。その時期落ち込んだ俺にとっては大切な居場所だったんだけど・・・」

「伸太郎は居場所を奪われたのよ、途中でサークルに入ってきた女に嵌められてね。サークルメンバーも長く過ごした伸太郎じゃなくて、その女の方を信じた。伸太郎の意見も、明らかに可笑しい点すらも確認せずに」

「んで、袋叩きにされた。そのサークルは何でも屋みたいな感じで荒事も解決したりしてきて、力が常人以上にあつた。その時は今みたいに体力が無かったからされるがままで・・・。紅茶ぶっかけられたり、鳩尾を蹴られたり・・・まあ、色々されてボロボロになって路地裏に捨てられて」

「私もその時は事情があつて伸太郎を支えることが出来ないから伸太郎の妹ちゃんに事情を伝えて・・・」

「本当に最悪だった、痛いし、シヨックだし、情けなかった・・・」
「そんな・・・！」

酷い話だ。だけど、それ以上に似ていた。

「だからさ、俺とはある案件を速急に終わらせてアイツらと縁を完全に切った。金輪際関わりたく無かったからな」

「復讐も考えたんだけど、あの連中の為に時間削つてやるのもバカらしいでしょ？だから関わりたくないようにここに移り住んだの。」

「・・・明久君も、同じなんです」

二人の話を聞いた優子が口を開く。その目には涙を湛えていた。二人は先を促すように静かに耳を傾ける。

「少し前に転校してきた男子生徒がいて、ソイツは明久君を苛めてて・・・、でもっ！明久君は優しいから、我慢して・・・！明るく振る舞つてたのに、今日、嵌められて！明久君がアイツを苛めた事になって・・・、皆明久君の話を聞かないし、信じないしで！」

遂には集団で暴力振るい始めて・・・、あだし、何も出来なくてっ！」

優子が我慢してきたものが溢れる。目の前できつとその光景を見てしまったのだろう。

貴音は立ち上がって、優子の背中を擦る。自分も同じだった、何も出来なかったから、声も届かなかったから。

「っ、呆然としてたら、先生が来て・・・。暴力振るつてた人の手が止まったから、その隙について明久君を支えながらさっきの所まで来たんです・・・。病院はあっち側に経営者の家族がいるから呼ぶに呼べなくて・・・」

「そこで俺達に出会ったんだな・・・」

「はい・・・」

すすり泣く優子に伸太郎は視線をふっと緩ませた。

「お前は・・・、いや、優子は何も出来てないなんて言ったが、それは間違いだ。」

「……………」

伸太郎の言葉に優子はまた首を傾げる。

「優子が一生懸命声をあげたから、俺が気付けた。明久の怪我が更に酷くなる前に俺が治療をすることができたんだ。今、ここでこうやって話せるのも優子が動いたお陰だ。何も出来なかったなんて嘘だ。ちゃんと一人一人を救ったんだよ。」

貴音もだ。前に言っただろ、あの時一緒に居てくれたから俺は諦めずに済んだって」

伸太郎は優子と視線を合わせて柔らかく微笑み頭を撫でた。

「よく頑張ったな。後は任せろ、俺達だって伊達に大人やってねえんだから」

「そうよ。私たち、こう見えても結構凄いなだから、遠慮なく頼りなさいね」

たった数十分前に出会ったばかりの人間だ、普通なら信頼なんて出来よう筈もない。

でも、何故だか二人は違う。絶対に裏切らない、そう思った。やはり、同じだからなのか。

「……………」

その答えは出なかったが、優子は漸く安心することができた。

眠りから《覚める》

明久が目覚めたのはあの日から3日ほど経った時だった。その間、伸太郎は明久の携帯を拝借して彼の親に優子を交えながら現状を伝えた。貴音は生業であるゲーム配信の片手間に明久に関する情報収集を続けた。

★★★

「……………んっ?こ、ここは——?」

明久が最初に目にしたのは見慣れない天井だった。軽く辺りを見回して得られた情報は病院ではない、ということと夕方であるということだけだった。

「ぐっ……………」

起き上がろうとすれば身体がズキリと痛む。痛みと同時に思い出すのはあの忌々しい出来事のこと。そして、唯一自分を信じてくれた彼女は無事なのかということだった。

痛みを堪え、扉へ向かってフラフラになりながら壁を伝って歩く。部屋が大きいのか、身体が痛むからか扉へ辿り着くまでに万全ではない明久は息が上がってしまった。

「や、やっと着いた……………」

——ここはどこなんだろう?」

ガチャリと扉を開けるとその音がいやに大きく廊下に響く。明久は恐々と薄暗い廊下へ一歩踏み出した。

「ろ、廊下ひろっ!?!……………っつう。大きい声出ただけなのにこんなに痛いなんて……………」

明らかに明久の家よりかなり大きい廊下を壁伝いに左側へ歩き出す。右は廊下の突き当りに階段があっただけなので、光が洩れていて、少し音が聞こえる左側へ必然的に歩き始めた。一歩一歩ゆっくりと、だが確実に光へ近づいて行くと少しずつ音が大きくなってくる。ガシャン、カチャカチャ、シャー、キュツ、トントントントンと何処

かりズムの良いその音を明久はよく知っていた。

ようやく光の元へ辿り着くいて部屋を見るとそこには黒いTシャツの上にエプロンを着けた少し歳上であろう男性がキッチンで料理をしていた。

「……………」

「ん？起きたのか……。おはよ……。う？」

男性は気配に気付いたのかダルそうに挨拶をするが、顔を上げて驚愕する。

「お前、起きたのか……。！おはよう」

同じ言葉なのにそれに込められた意味や感情が先程とは違うのを明久は何となく感じ取った。戸惑いながらも取りあえずは、と挨拶を返す。

「お、おはようございます……。あの、貴方は誰なんですか？ここは何処なんですか？」

「そう思うのも最もだ。だが、まあまずはソファにでも座れ。立ったままはキツイだろ？」

それに、あと30分もすればあいつらも起きてくるだろうから」

指を指された先にはL字のソファと1人用のソファが、確かにいくら壁に凭れているとはいえ、立ったままはキツイのでお言葉に甘えてL字ソファに腰を下ろす。床にはモコモコのカーペットが敷いてあり、ソファの前にはガラスのローテーブルがある。ローテーブルを挟んで反対側には大きな液晶テレビが置いてあった。

既に付けられていたテレビを見ながら明久は今が夕方ではなく、早朝であることを知った。カーテンから伸びる光だけで判断したので勘違いしてしまっていたのだ。

ボーツと天気予報や流行のモノを紹介するニュース番組を見ていると明久が入ってきた扉から誰かが現れた。そして、その人物に驚愕する羽目になった。

「おはよう、おにいちゃん……」

「おはよう、桃。今日は早いな」

「んー、仕事用のアーム切るの忘れちゃってた……。おかげで目が

「さえちやって」

「それはドンマイだな、顔は洗ったか？」

オレンジ色の短めの髪とサイドテール。TVで幾度と無く聞いてきた声。なんならさつき流行紹介でも見たばかりだ。

「もちろん。ってあれ？起きたんだ？」

あまりの衝撃に放心状態にあった明久はハツとして正氣に戻る。

「き、如月桃さん!？」

「あ、知ってるんだね」

「お前のこと知らない人の方が少ないだろ」

「そうかも・・・？自己紹介は皆が集まってからにしようか。」

「わ、分かりました・・・」

明久はいよいよ自分の置かれている状況が分からなくなっていた。目覚めたら豪邸にいて、傷だらけの身体は処置が施してあり、知らない人がいるかと思えば超有名アイドルが現れ……。混乱するなという方が無理な話であった。

「桃、あの二人はまだか？」

「さつき洗面所ですれ違ったからもうそろそろ来ると思うよ」

「そうか、なら丁度良いな。料理できたから桃も配膳を手伝ってくれないか？」

「はい」

明久が必死に状況を整理していると、食卓に次々と料理が並べられていく。

「よし、大体は並べれたな。俺は貴音を起こして来るから後は頼んだぞ」

「りようかーい!」

桃は元気に返事をしてから残りの料理を並べ始めた。明久は未だに混乱している。

どうすれば良いのかあたふたしているうちに明久の耳に馴染みのある声が入ってきた。

「おはようございます。桃さん」

「おはようなのじゃ、師匠」

「ゆ、優子さん!?!秀吉!?!って痛あ・・・」

「あ、明久(君)!?!起きたの(か)!?!」

明久の声に気付いた二人が駆け寄る。目の端には涙を浮かべて喜んでいいる。

「目が覚めてよかったわ!」

「明久、お主は三日も眠っておったのじゃ」

「そ、そんなに・・・」

「ふああ・・・。あ、本当に起きてるわね」

「だろ?しかも割と元気そうだよな」

「お、おはようございます?」

「ん?ああ、おはよ」

優子と秀吉とわちやわちやしているとさっきの男性が桃とは別の女性を伴って現れた。

「お、二人も来たか。おはよう」

「おはよ」

「おはようございます」

「おはようございますなのじゃ」

男性は明久の視線に気が付き、言葉をかける。

「聞きたいことも沢山あるだろうし、メシでも食いながら話そうぜ」

「はい」

食卓に皆が座って挨拶をしてから食事がスタートする。明久の分はお粥になっていて胃に優しい。

「俺は如月伸太郎だ。伸太郎と呼んでくれ。」

桃は俺の妹だ、隣にいるのが・・・」

「如月貴音、伸太郎の妻よ。私のことは貴音って呼んでちょうだい」

「それで、私が如月桃。お兄ちゃんたちの妹だよ、桃って呼んでね!」

「あの日、伸太郎さん達が助けてくれたのよ。怪我の処置も伸太郎さんがしてくれて」

「ワシらの面倒もわざわざ見てくれておるのじゃ・・・」

「な、なるほど・・・。僕は吉井明久です。なんだか、色々お世話になっちゃったみたいで・・・。ありがとうございます・・・」

明久は優子と秀吉の補足を聞いてようやく緊張が解れたのであった。一先ず、最低限必要な紹介が終わり食事が再開する。

なんだかんだーメシ食いながらとー言っても自己紹介の時は皆箸を置いてきちんと話を聞いていたからだ。

（嵌められてリンチされた時は先が見えなくて、全てを諦めそうだったけど・・・）

明久は楽しそうに食事をする皆を見る。

「だし巻き卵もーらいっ！」

「あつ、お前！」

「お兄ちゃん、鮭少し貰うね〜」

「っ！桃まで・・・!!」

「漬物少し頂きますね！」

「おいこら優子!!」

「ならばワシはこれを貰おうかのう・・・」

「ひ、秀吉もか・・・！」

ヒョイヒョイと皆が伸太郎の皿からおかずをかつさらっていく。その度に嫌がりながらも笑う伸太郎を見て明久は謎の安堵感を得るのであった。

「伸太郎さん」

「な、まさか明久まで・・・!?!」

「違います。えっと、これからお世話になっても良いですか?」

「ああ。そんなことか、元よりそのつもりだ。お前のご両親にも了承は得ている。俺たちは全力でお前らをサポートしてやるよ」

「はい・・・!」

この出会いが後に明久の将来を大きく変えることを今は誰も知らない。

信頼の証

「——という感じで今は安定してます。傷も殆ど塞がってきました」
『そう……。何から何までごめんなさいね、伸太郎くん。私達があの子の側にいれてやれないばかりに……。』

「いえいえ、気にしないでください。俺達が勝手にしたことですし」
『ありがとう、伸太郎くん。貴音ちゃんや桃ちゃん。優子ちゃんと秀吉くんにも伝えておいてくれると嬉しいわ』
「ええ。もちろんですよ」

『それと……。』
「なんですか？」

『あの子とこのまま一緒に暮らしてあげてくれなにかしら？食費や学費、その他諸々はもちろん私達が負担するわ。あの子をこれ以上傷つけられたくないの、お願いします……。！』
「もちろんですよ、俺たちからもお願いします。」

『本当に、何から何まで……。二人には一生頭が上がりそうにないわ』
「いいんですよ。俺の家は妻と二人で住むには広すぎますし、明久達がいるくらいが丁度いいですよ」

『二人とも、本当にありがとう。そろそろお暇するわね』
「分かりました。お仕事お疲れ様です」
『ありがとう。そちらはお仕事頑張ってね』

ピッ！ツーツーツー。——
電話が切れてほうつと一息吐く。今の電話の相手は明久のお母上だ。

最初に経緯を話し、面倒を見ると言ったときに1週間に1度、経過報告を頼まれたのだ。明久はきつと私達に心配を掛けないように振る舞うだろうからと。

「母親ってのは偉大だな」
「……。？。」

「直に見ずとも息子の状態を推測できるし、俺たちみたいな若造にも子どもの為だと偉ぶらずに頼み込むことができる。普通は変なプラ

イドに邪魔されて出来ない人の方が多い」

「そうね、私も身に覚えがある」

「俺もある」

うんうんと頷きあっていると書斎——と書いて伸太郎の部屋と読む扉がコンコンツと叩かれた。

「お兄ちゃん、貴音さん！明久君達にご飯出来たよ、だって！一緒に食べよう！」

「ありがとねー、桃ちゃん！」

「おう、教えてくれてありがとな。つてあれ？桃、仕事は？」

「あれ？言つてなかったっけ？殆ど収録済んだから今日はゆっくり出来るって」

「言つてないぞ！つたく、前もつて言つてくれれば外食に皆で行つたのに」

「え〜！それなら夜に行こうよ！」

「んー、俺は良いけど。貴音は？」

「大会は昨日終わったから問題ないわ」

「じゃあ、あとは明久達に聞いて決めるか」

「異議なし！」

これから昼食だというのにもう夕飯の予定を組み立てる二人に伸太郎は呆れつつ、食卓へと続く扉を開くのであった。

〜夜まで割愛〜

あれから明久達と相談してやはりというべきか出掛けることになった。目的地はそこそこ高い焼肉屋だ。自炊が出来る俺たちは外食に頼ることが殆ど無いので結構久しぶりだったりする。

「何頼みます？」

「カルビ食べよう！」

「野菜も食おうな？俺はトリが食べたい」

「確か、味噌汁も頼めるわよね？私にご飯と一緒にバランス良く食べるわ」

「貴音さん、キツチリしてますね・・・」

「ま、昔から主食とか副菜キッチンとしてたから、肉単体は落ち着かなくてね。皆、飲み物は何にするの?」

「俺はー」

「どうせ、コーラでしょ?」

「その通り」

「私はオレンジジュースで!」

「ワシは烏龍茶でお願いするのじゃ」

「僕もコーラでお願いします!」

「私は緑茶で」

「オーケーよ」

貴音が皆の要望の品をタブレットを操作して注文カゴに入れていく。少し待って注文したものが次々に運ばれてくる。焼く担当はとうやら伸太郎と明久のようだ。

「お兄ちゃん、これもういい?」

「おー、いいぞー。秀吉それはもう少し待て」

「了解なのじゃ!」

「豚焼けたけど、いる人?」

「じゃああたしがもらおうかな」

「おっけー、皿に乗せるね」

火を点火して油をひいてもらってから焼いていく。さすが育ち盛りというべきか焼かれた側から直ぐに無くなる。見ている気持ちいいくらいの食べっぷりだ。

「明久も食っていいぞ。肉は俺が見てるから」

「でも、それだと伸太郎さんが・・・」

「あー、俺は元々少食だから気にすんな。」

「それなら、お言葉に甘えて・・・」

遠慮気味だった明久も肉取り合戦に参加する。伸太郎はよく食べる四人を優しく見守りながら自分も少しずつ箸を伸ばすのだった。

「そういえばさく」

皆が満腹になったところで、唐突に桃が切り出す。デザートのパフェに目を輝かせながらも口を開くことはやめない。

「優子ちゃん達って私より年下なんだよね」

「ん？ああ。そうだな」

「じゃあさ！じゃあさ！二人とも、私のこと《お姉ちゃん》って呼んでみてよ！」

「へ・・・？」

困惑する二人をよそに盛り付けのウエハースをサクサクと食べ進める。手についた粉をペロリと舐めて話を再開する。

「私って末っ子だし、身の回りに年下の子が殆どいなかったからお姉ちゃんって呼ばれてみたくて・・・」

「あー、確かに親戚も年上ばっかだしな」

「そう！だからお願いっ！」

桃は食べ終わったパフェの容器を前に手をパンッと合わせてお願いする。

「てか、食べるの速くねえか？こいつ・・・」

それはさておき、桃の必死なお願いが聞いたのか二人は顔を寄せあつて相談している。

相談が長引きそうなので、会計を終わらせて、店から出ることにした。

桃が秀吉に頼まなかったのは秀吉が既に師匠と桃のことを呼び慕っているからだろう。

ちなみに秀吉はお茶を飲んで「ほうっ・・・」と寛いでいる。一瞬縁側にいるような錯覚を覚えたくらいには。

秀吉を見てほっこりしていると、話がついたのか二人は俺達を呼び止めた。

「え、えっと・・・。兄さん、姉さん、あの日僕らを助けてくれてありがとう・・・！」

「お兄ちゃん、お姉ちゃん達がいなかったら、きっと私たちは何も信じられなくなってたから・・・」

「うむ、兄上、姉上、師匠。ワシからも感謝を。明久と姉上が元気でいれるのは間違いなく、兄上達のおかげじゃ。」

「……!!」

ビックリして前につんのめる。

桃のことをちよこつとだけ「お姉ちゃん」と呼んで終わると思っていたのに、不意打ちを食らった気分だ。

桃は笑ってるけど、もしかしてこの展開が分かってたのか？いや、流石にないか。

横で歩く貴音を見ると目を潤ませていた。どうにか泣かないようにしてるけど、あと一押しで涙腺は決壊してしまうだろう。

「良かったね、お兄ちゃん、貴音さん」

「おう……。ずっと、余計なお世話なんじゃないかと思ってたんだ……。だからさ……」

「こつち、こそ、ありがとう……」

貴音は声を震わせながらも伸太郎の言葉を継いで思いを伝える。貴音だって、明久達に救われた部分はあるのだ。自分達と彼らを重ね、昔とは違い、手を伸ばせるのだと……。

そこで終わりだと思った伸太郎だったが、明久から予想外の言葉が飛び出してきた。

「あの、これからも、兄さんって呼んでも良いですか？」

「……ああ。それと、タメでいいぞ。」

「良かった……。これからもよろしくね。」

そう言っつて明久はふわりと自然な笑みを浮かべた。今まで、その笑みは優子と秀吉にしか向けられ無かったもの。信頼の証……。

貴音はもう限界のようだ。そつと貴音の手を握って、誤魔化すように明久達から顔を背け、前を見る。

ほんの少しだけ足を早めて明久達より前に出ると視界が滲み始めるのを気付かないフリをして、伸太郎は

「こつちこそー」

と、返事をするのであった。

はいすぺつくー!

「あ、そういえば……」

「「??」」

リビングで休憩していた伸太郎が何かを思い出したかのように呟くと、近くでゲームに興じていた3人が不思議そうに振り向く。

「明久と優子は学校どーすんだ?」

「あー、そうね。行くにしても行かないにしてもそこはハッキリさせないとよね」

伸太郎の質問に貴音たかねはゲームを再開しながら同意をする。それに対して2人はほぼ同時にこう答えた。

「もう行くつもりはないよ(わ)」

「だよな。なら、残りの学習内容は俺が教える。余裕があれば、入試の要点も詰めるか。」

定期的に届く学校からのプリントに考査の問題用紙とかもあるだろうし、それも活用していくか。そこから2人が苦手な傾向を割り出していけば学校で学ぶよりも深く理解できるはずだ」

コーヒーを片手になんてことなさそうに呟いた伸太郎に2人は分かりやすく驚く。それを感じ取ったのか貴音はゲームの手は止めないまま伸太郎の言葉を補うように付け足す。

「安心していいわよ、伸太郎の実力は私が太鼓判を押ししてるわ。元々は赤点ばかりだった私が平均以上をキープできるようになったのも伸太郎のお陰だし」

「貴音は元々頭が悪いわけじゃなかったからな、事情があつて授業に集中できなかつただけで頭の回転は元々良い。だから、教えるのは楽だった。というか、桃と比べれば誰でもマシってもんだ」

遠い目をしながら『あれは大変だった』という伸太郎に2人は興味を示す。

「姉さん(お姉ちゃん)?」

「ああ。アイツに教えるのは本当に大変だった……」

「私を見て面白かったわよ?」

「そのあと桃に覚え方を請われて涙目になったのは何処のどいつだったか・・・」

クスクスと笑いつつ、からかうように言う貴音に伸太郎はカウンターを食らわせる。

——明久と優子は操作を途中で放棄したため、棒立ち状態になっていたので他の敵にとっくに倒されている。貴音は敵を殲滅し、二人のバナーをきっちり確保したようだ——

「うっ・・・！そ、そうだ。2人とも、私も桃ちゃんも《お姉ちゃん》呼びだと紛らわしいでしょ？それ、どうにかしない？」

「・・・（露骨な話題転換に対するジト目）」

「からかってごめん、だからその目をやめてください・・・」

途中、貴音はどうか話を逸らそうとしたが伸太郎の無言の攻撃に敢えなく撃沈した。

——ちなみにこの間もゲームの手は止めずに動かし続けている——

はあと溜め息を吐いた伸太郎は立ち上がり、貴音の頭を撫でる。

「そこまでヘコまなくても良いだろ・・・」

「だって・・・」

「このマッチの後で久しぶりに俺もゲームに参加してやる。だから元気出せ」

「おっけ！この試合直ぐに終わらすわ!!」

しよんぼりしていた貴音を元気に敵プレイヤーを抹殺するいつもの貴音に戻すと、伸太郎は明久と優子に向き直る。

「明久、優子、勉強に関して俺が見る。それでいいか？」

「もちろん!」「はい!」

「ああ、あと・・・」

「??」

「さっきの貴音の意見もごもつともだから、何か考えといてくれると嬉しいよ」

伸太郎は柔らかく笑ってそう言うと、貴音の横に座って、何処からか取り出した明久達とは別のとある”大きな液晶画面をもち、取り外

し可能なコントローラーを持つ携帯ゲーム機”を起動させ始めた。

「よし！勝ったわ、伸太郎！さつきと次を殺るわよ！」

「さて、物騒な単語が聞こえたぞ！」

「そんなことどうでも良いのよ！って、今回はパソコンでやらないのね？」

「こつちに貴音達がいるのに何でわざわざあっちまで行く必要があるんだ？」

「でたよ、天然……」

テンポよく交わされる会話は一部物騒ではあったが、夫婦の仲の良さが伺える。

そんな如月夫妻をよそに、彼らが可愛がる新しい弟妹は頭を寄せ合って、コソコソと何かを話していた。

「ね、兄さん……、伸兄さんって前から思ってたけど、もしかしてチートスペックってやつなのかな？」

「そうね。お兄ちゃん……、伸兄さんって、何者なのかしらね？この家も大きいし……」

「桃姉さんは超絶有名アイドルだし、当たり前のように伸兄さんも貴音姉さんも整った顔立ちだし……」

「貴音お姉さんはあたしでも知ってるようなプロゲーマーだし……」

「如月家って一体……？？」

「ねえ、明久君。この前、桃お姉さんが出た音楽番組覚えてる？」

「うん？ああ、あれか、もちろん覚えてるよ」

「ならあの時、桃お姉さんが爆弾発言したのも覚えてるわよね？」

「もちろん、あの有名な“C i t r i n” Pが兄なんです！って満面の笑みで……ってあれ？」

「あの時は『へーそうなんだ』って軽く流してよく考えなかったけど、伸兄さんがC i t r i n Pだったのね。やっぱり伸兄さんもすごい……」

衝撃の事実が発覚したところで、楽しそうにゲームをしている兄妹の方を見ると更なる驚きの光景が。詳しく言えば、大画面のテレビでプレイをしている貴音のゲーマーとしての名前【E n e | c n c】の上。

そこに伸太郎のネームであろう【Nemophilatoro】。それが2人がポカンとする要因であった。

たっぷり3分ほどかけて、正気に戻った明久と優子は再び頭を寄せ合う。

「ねえ、優子さん」

「なに？明久君・・・」

「僕の気のせいじゃなければあの名前はFPSやTPSで超有名なプレイヤーの名前に見えるんだけど・・・」

「安心して、明久君。ここは紛れもなく、どうしようもなく現実よ」

「そっかそうだよね！」

「ええ、そうよ！」

『あつはつはつは！』

まったく同時に笑い声が重なるが、彼らはそれどころの話ではない。ピタリと笑うのをやめるとまた顔を寄せる。

「どういうことなの!？」

「今日に来て2度目？いえ、3度目の驚きに脳が追い付いていけないわ！」

「僕もだよ・・・!」

伸太郎のプレイ画面を見ると、貴音が使っている機種より、圧倒的にやりにくいはずにも関わらず、それをものともせず部隊を壊滅させていく光景が映った。

「本物だー!」本物ね!」

2人は深夜テンションのような、謎のテンションになってしまっていた。恐らく、度重なる驚愕に脳が着いていけず、キャパオーバーしてしまったのだろう。

しかし、こうなるのも仕方ない。それほど【Nemophilatoro】の名前は有名なのだ。

Citrinの名前と同じくらいには。

笑顔動画や大手動画サイトを見る人、またはFPS、TPS——全く別ジャンルのゲームでも有名だが——を軽く嗜む程度の人でも知らない人はいないほどに。

彼らのプチパニックが収まったのは、秀吉が帰ってきてからのことであった。

「どうしたのじゃ？2人とも。鳩が豆鉄砲を食らったと思ったたら後ろから猫にパンチをお見舞いされたような顔をして・・・」

「い、いや。ちよつとね」

「アンタは何処に行ってたのよ？」

「見ての通り学校じゃ」

そう言われて改めて秀吉の格好を見ると中学指定の学ランとバッグを持っていて。まさに学校帰りの学生といった感じだ。まあ、現在の時刻は通常の下校時間よりも一時間程早いのだが。

「学校に行ってたの!?怪我はないの!?」

「何も言われなかった!?僕のことを引き合いに出されて何かされなかった!?!」

「お、おおお落ち着くのじゃ!姉上、明久!ワシはこの通りピンピンしておるし、学校に行っていたとは言っても、教室におったわけではない!特例が認められ、ずっと屋上や保健室におったのじゃ。

奴らはそのことを知らぬから何かをされることも機会もない!だからワシを揺らすのをやめるのじゃ!」

「あつ、ごめん」

「何はともあれ、無事で良かったわ」

「まあ、事前に言わなかったワシも悪いのう。次からは事前に相談するのじゃ」

「うん、そうしてくれると安心かも」

「学校にいる間は何をしてたの？」

「兄上からの課題じゃ」

そう言って秀吉が取り出したのは小冊子にまとめられた問題集だった。優子がそれを受け取って明久は横から覗き込む。パラパラ捲ると左側に要点の説明と例題、右側に実践問題と応用問題が乗っている。説明は分かりやすいし、テキストに挟まっている回答も丁寧に解説してあり、市販の物よりも理解がしやすい。

「な、なにこれ!僕でも分かるよ!」

「すごい・・・。あたし、この問題理解できるまで時間掛かったのに」
「これ、兄上のお手製とのことじゃ」
「えっ・・・」

明久と優子は考えることを放棄した――。

来客《壹》

彼は前触れもなく現れた。

「や、伸太郎君。久し振りだね」

「ん？あー。名取か、久しぶりだな。柘はどうした？」

「相変わらずサツパリしてるね、君。柘は別件で出払っていてね……」
「いつものことだろ。柘は居ないのか、そりや残念だ。で、今日は何の用だ？桃と打ち合わせか？それともあつち絡みか？」

「いいや、どちらとも違うよ。ただ近くに立ち寄ったから挨拶にでも、と思つてね。ところで、そこの子達は？」

帽子を脱いで胸に当て、伸太郎と朗らかに会話をする彼は桃と同じくらい人気を持つ、《名取周一》なとりしゅういちその人だった。

——伸太郎と同じソファで和気藹々としていた3人はポカンと口を開けている——

見知らぬ3人になにかを見定めるような目線を送りながら名取は伸太郎に聞いた。

「俺と似てたから助けた。以上。」

「えっ？」

簡潔というか、雑というか、三行どころか一行で説明を終わらせた伸太郎に流石の名取もそのクールフェイスがとけて驚く。当の本人は手元のタブレットから視線を外す素振りもみせない。

「あの？伸太郎君、もう少し詳しく話してくれたりは……？」

「少なくともあつち方面関係ではない。知りたければ彼らに許可取つてから聞いてくれ。」

もつとも、聞いていて気持ちのいい話ではないけどな」

「ふむ」

伸太郎からお情け程度の補足を聞いて、名取は思案する表情を見せる。

「聞いてもいいかい？もし、つらいことなら無理に話さなくても良いから」

「——」

さつきとは違って優しい視線を3人に送る名取。話題の中心になつてしまった3人は顔を合わせて何かを話し合う。明久が何かを言ったあと、木下姉弟はコクコクと頷いて、名取ではなく伸太郎に向き直る。

「伸兄さんしんにい」

「なんだ？明久。」

「この人は、名取さんは信頼できますか？」

「んー……」

「伸太郎君。そこは悩まずに即答してほしいな……」

「そうだな。名取は名取でツライ目に遭つてきたのは確かな事実だ。そこは信用できるぞ、後はお前らで判断しろ」

そう言うと言問に答える為に上げていた顔をまた俯けた。明久達は考え込む。

秀吉は名取の目をジツと見つめる。

「秀吉？」

「……明久、姉上。ワシは信用できると思うぞ」

「そう……。なら、話すかどうかは明久君が決めて。その権利があるのは貴方だから」

「分かったよ」

明久の表情はいつもより固く、無表情気味だ。あんなことがあつたのだから、見知らぬ人に警戒心を抱くのも仕方ない。しかも、自分の傷口に触れようとしているのだから。

それでも、『無理だ！』と突っぱねないのは明久本来の優しさと、伸太郎の友人だから、という点の為だろう。

全く、どこまで行ってもお人好しである。

「じゃあ、聞いてもらえますか？少し前に起こつた、絶望的な話を。僕たちが伸兄さん希達望に出会つてからの話を。気分が悪くなるかもしれませんがよ？」

「大丈夫さ。」

どうやら、明久は話すことにしたらしい。

事件のことを詳細に聞くチャンスかもしれないと、伸太郎はタブ

レットを操作しながらも耳を傾けた。

『目を背けたくなる話』

さて、どこから話しましょうか。あ、名取さんはお時間大丈夫ですか？今日はオフ？そうですか、なら最初から話しますかね。

あ、要らないところは省きますから安心してくださいね。長くなってもいい？・・・ありがとうございます。じゃ、始めますね。

——全ての始まりは

「春というには少し暑い日のことでした」

☆☆☆

「転校生・・・？」

「らしいのう。お陰様で皆騒がしいのじゃ」

『落ち着いて本も読めやしない』と肩を竦めながらその騒々しさに秀吉は眉を寄せる。

「まあまあ、そう言わずにさ。ほら、もうすぐチャイム鳴っちゃおうよ？」

「むう・・・」

着席を促すと顔を少ししかめたまま、秀吉は席に戻っていく。それを苦笑しながら送り出すと僕は、まだ見ぬ転校生に思いを馳せた。

「皆、知ってると思うが、転校生だ。」

「初めまして、俺は久根畔戸ひさねくろとだ。皆、これからよろしくな。」

『よろしく〜』『かつこい〜』

簡潔に自己紹介を済ませた転校生・・・、久根はクラスから拍手を受けながら教師に指定された席へ着く。

「よろしく」

「あ、うん。よろしくね！」

その席は明久の隣だった。席に着いた久根に手を差し出され、快く握る。明久には痛いくらいの握手だったが、明久はそれを顔に出さずにニコニコと挨拶をするのであった。

「あやつ、あまり良い予感がせぬな・・・」

少し離れたところから転校生の様子を伺っていた秀吉は昼に明久に相談しようと思いに決めた。

「どうしたの？秀吉、そんな難しい顔しちやってさ。折角のお昼なんだからもつと楽しく食べようよ！」

「ん？ああ、少し気になることがあつての。

そういうえば、朝、明久は大丈夫だったか？

手、かなり強く握られたじやろ？」

「あ、まあね。でも、彼も悪気があつたわけじゃないだろうし、大丈夫だよ！」

「そうか？」

「・・・もしかして、何か気になることでもあつた？」

「ん、そんなところじゃ。あやつの目、どこか濁つておつた。念のため、気を付けるように言っておこうと思つてな」

「そっか。秀吉は人を見る目があるからね、それなら気を付けておくとよ。心配してくれてありがとうね」

「気にするな、親友の為じゃ。それと、手が痛むようじゃつたら、保健室にいくのじゃぞっ！」

「分かつてるよー！」

——それから、1ヶ月くらいは何もありませんでした。僕はいつも通り皆の手伝いをして過ごしたし、秀吉の言ったことを思い出しながら彼と接してました。それでも何か危害が加わるようなことは起き

なかった。

だから、油断してたんです。このまま何事もなく卒業できるって。秀吉の勘が珍しく外れたな、って。今思うと、甘い考えでした。

異変は梅雨頃に起きました。

「あれ？傘がない・・・」

「どうしたのじゃ？明久」

「いや、傘がなくなってる」

『可笑しいな』と傘置き場をしばらく探して、どこにも見当たらないので秀吉の傘に入れてもらって帰ることにしました。大方、誰かが勝手に借りパクしたのだろう、と。

学校で傘が無くなる、なんてよくあることじゃないですか？柄物だとあんまり無いかもですけど。よくあることだとしても、母が送ってくれて大切に使ってたものだったのでかなり落ち込みましたね、借りパクするには不向きな傘だから尚更。運が悪すぎる！って。

そこからがスタートでした。最初は細かいものから無くなりました。消しゴム、シャーペンの文房具類。その次は私物の本やストラップ。どんどん、無くなるものは大きくなっていきました。

いくら鈍い僕でも、これは可笑しいことに気付きました。もしかして、自分は知らず知らずのうちにこんなことをされる要因を作ったのかと。誰かに何かをしてしまったのかと落ち込み僕を見かねて、秀吉と優子さんは3人で遊ぶ計画を立ててくれました。

「いやー、参ったね。雨がここまで酷くなるなんてさ。」

「そうね、降水確率は50%だったのに・・・」

「しかも、じめじめして気持ち悪いのじゃ。」

「ん？あれは・・・」

「どしたの？秀吉」

「なあ、明久。お主の傘ってここら辺では珍しい傘じゃったよな？」

「??、うん。母さんが前に海外製の丈夫なの送ってくれたから、無くさないように皆に不人気な《おしるこーら》の海外限定ストラップと人

工の恐怖と名高い《紅鮭ちゃんSP磯の香り》の特別バージョンのストラップを付けてたよ。あれなら借りパクする気も失せるかな？つて、まあ、結果がこれなんだけど……」

「それがどうしたっていうのよ？」

「いや、あれ。」

秀吉が指差した方向には何の偶然か、一月前に転入してきた《久根畔戸》。

その手には――

「あ……、僕の、傘」

「えっ？」

それは紛れもなく、明久の傘だった。彼の母が贈った傘自体も。レアものの、おしるこーらのストラップと紅鮭ちゃんのストラップはもちろん、使っていて付いたキズもどれも見覚えあるものだった。

呆然と傘を見つめる明久の視線に気付いたのか、久根は顔を上げる。パチツと明久と目が合った久根は口元を歪めてわざとらしく笑った。そして、『見ちまったなあ？』と口を動かした気がした。

――その次の登校日から、明久の周りに不可解な現象が起き始めた。

☆☆☆☆

ここまでで何か質問は？盗まれたもの？

当時、友達だった人と撮った写真やプリクラとか、お揃いのストラップとか色々です。

他に無いですか？そうですか、じゃあ再開しますね。

☆☆☆☆

不思議な現象なんて言いましたが、そこまで勿体ぶるようなことでもないんです。今まで人知れず僕がしていたことが久根畔戸の手柄になってたり、反対に僕に一切覚えのない悪行が僕のことになっ

ていたり。

手柄はどうでも良かったんです。褒められたくてしたわけじゃなかったし。それに、先生たちは久根畔戸の手柄になったことが本当は僕がしたこと、って知っていたみたいでいつもみたいに接してくれました。悪行だって、質の悪い噂だから気にするなって言ってくれました。

問題は生徒でした。僕のことをよく知ってくれている一部の人や以前手助けした人は先生達と同じように変わらずに接してくれたけど、今まで少し関わっただけだったりした人は僕を疑う？か嫌悪する視線を露骨に見せ始めたんです。

一週間も経てば噂には尾ひれや背びれが付き始めて『吉井明久が人の物を盗んだ』だとか『吉井明久が誰々を殴った』とか。

それがどんどんエスカレートしていったある日のことでした。

？―？―？

「おい、なんだよコレ!!」「ふざけんな!」「嘘でしょ・・・!」

登校した僕を待ち構えていたのは秀吉を除いたクラスメイトから、学年中からの敵意でした。各教室がぐちゃぐちゃにされていたんです。教卓も椅子も机も、皆が置きっぱにしていた教科書も全部綺麗にぶちまけられていて、一部のものは壊されてもいました。

その中で異質だったのは、たった一つだけ綺麗に並んでいた机でした。僕の机です。

皆は僕を疑いました。先生のものも、生徒のものも、等しく台風が通ったかのように荒らされた中、何一つ変わることない僕の机、ロッカー。自分たちの物は勝手に触られ、ゴミのように床に散らばっているのに、最近悪評の酷い吉井明久のものだけはそのまま。

決定的だったのは、梅雨の時期に盗まれたストラップ、プリクラ、写真が壊され、破られ、明久僕以外の人間の顔を塗り潰された状態でゴミ箱に捨てられていたこと。これまで、辛うじて僕の側にいてくれた人も、僕の話の間かないまま離れていきました。疑うにも、憎むにも、十

分な要素を僕は持ってしまったみたいでした。

このあと、先生が来て取り直してくれただけ。それから今までと比べ物にならないくらい在地獄が待っていました。

登校すれば、机と椅子は廊下やベランダに押し出されていたり、水が撒かれていたり。授業中は何処からか消しゴムや丸めた紙が投げつけられたり。ロッカーに何か置こうものならバラバラにぐちゃぐちゃに徹底的に痛め付けられて捨てられてました。

先生が注意しようものなら更にバレにくく、狡猾に、残酷に実行されました。

自分達にしたことと同じことをしてやると言わんばかりに。危害を加えてくる人達に僕がいくら『してない』と言っても信じてくれる人は誰一人としていなかった。

？―？―？

そして、最後にして最大の事件が起きました。いつも通り、靴箱に入れられたゴミを片付けて、教室に行き、荒らされている机とロッカーを整理して。自分の身を守るように、うつ伏せになって朝学活が始まるのを待っている時のことでした。

久根畔戸が『昼休み、北校舎の2F、3Fの間の踊り場に来い。来なければ木下たちにも危害を加えてやるよ』と言ったんです。

僕がやられる分には良かったし、我慢できました。でも、こんな状況になっても前と変わらずずっと一緒にいてくれる二人にまで何をしようと言うのか、怒りも沸いたし、自分のやるせなさに泣きそうになりながら昼まで耐えて、僕は指定の場所に行きました。

「・・・なんの用？」

「おつ、来たか。クククツ」

いつかの秀吉が言った通り、邪悪に笑う彼の目は濁ってる気がしました。

「俺さあ、最初見たときからオマエのこと嫌いだったんだよ。良いこちやんぶって教師に尻尾振ってよお、そのくせ、他の連中からは頼り

なんかがここにいていいと思ってるのか!？」『オマエが彼を傷つけたんだから俺達がオマエに制裁を加えてやる!』

そこからは徹底的に、今まで以上にしごかれました。顔も鳩尾も腹も全力で殴られて、気絶しようものなら水をかけられて目を覚まさせられる。かわるがわる、日頃の鬱憤を晴らすかのように、僕を痛めつけました。

ある人は辞書の角で、またある人は上履きで、力の弱い人はそういう道具を使って僕に『制裁』を加えていきました。

——これが僕目を背けたくなるの絶望の話です。

『ジャージのヒーロー』

それから、僕は優子さんに手伝わながらどうか学校を抜け出しました。歩くのもやっとで、足取りはフラフラ、出血も激しく、息も絶え絶え、やっとの思いで、伸兄さんと貴音姉さんと出会った場所に着いて、力尽きて倒れました。

☆☆☆

——と、ここらは少しの間優子さんにバトンタッチしますね。

——その日から3日間のこととはあたしが話します。明久君じゃないのか？

………3日間寝込んでたんですよ、明久君。

☆☆☆

明久君が意識を失ってから、あたしは何も出来ませんでした。救急車を呼ぼうにも、近くの病院は明久君のクラスメイトのA君の家が経営していて、頼ることが出来なかったんです。彼の親は身内鼻屑で有名なので尚更。

もうどうすればいいか分からなくなっって。

ただ、助けてと泣き叫んでいたところに赤いジャージと青いジャージを着て買い物袋を持った二人組が現れました。……お察しの通り、伸太郎さんと貴音さんです。

お二人の第一声は『どうしたの？』ではなく『大丈夫!?!』でした。その時、あたしはお二人に背を向ける体勢だったので慌てて振り返ると、さつき言った格好の二人が立ってたんです。正直言うと、驚いたんですけどそれどころじゃなかったので直ぐに『助けてください!』って言ったんです。

普通、人つて見るからに厄介なことからは目を逸らすじゃないですか。それなのに二人は何も聞かずに『分かった』と即答。

病院に行かない理由も聞かずに伸兄さんは素早く明久君を背負うし、貴音姉さんは何やらスマホを操作するしであまりに迅速であたしは困惑しましたよ。

早足で急ぐ彼らのあとをあたしは呆然と着いていくだけでした。貴音姉さんは『きつと大丈夫』『もう少しだけ頑張つて！』つてずつと声を掛けてくれて、本当に有り難かったです。この家に着いてから、明久君はゲストルームに運び込まれました。伸兄さんの処置が終わるまであたしはただ、踞っていました。

あたしに出来ることはもつとあつたんじやないか？とか、色々思っちゃって。そんなどうしようもないことをぐるぐると考えていると貴音姉さんに声を掛けられました。

『とりあえず、お風呂入ってきなさい。服なら貸すし、あの男の子なら伸太郎がちゃんと診てるから大丈夫。』

後々教えて貰ったんですけど、あたし、明久君の血とか汗とか土とかで、かなり汚れていたみたいで。

処置が終わったあと、着替えさせられてベッドに横たわる明久君を保護してくれた2人と見ていました。包帯だらけで痛々しい彼から視線を離すと伸兄さんは私へ自己紹介をしました。

「さて、遅くなったが自己紹介といこうか。

俺は如月伸太郎、歳は22だ。」

「如月貴音、伸太郎の妻よ。歳は22。両方如月でややこしいから、あたし達のは下の名前で呼んでちょうだい。」

「あたしは、木下優子です……。それで、傷だらけの彼が吉井明久君です……。」

目を覚ます気配を見せない彼……。明久君の周りに椅子を置いて3人は自己紹介をする。

「とりあえず、彼の状態だが暫く安静にする必要がある。彼のご親族

はこの怪我に関する事を把握しているのか？」

「恐らく、把握してないと思います。前に彼は『両親と姉さんは海外で暮らしていて、僕は一人暮らしなんだ。』と言っていました。」

彼が連絡しない限り情報は届かないかと」

「そうか……」

「あ、あの……」

「ん？なんだ？」

会ったばかりで、それも助けしてくれた人に対して不躰な質問だった
なと思います。

でも、聞かずにはいられなかったんです。善人って言葉だけで済ま
せられるほど、その時、私は人に希望を持ってなかったの。

「どうして、ここまでしてくれるんですか？見ず知らずの、それも一目
で厄介事だとわかるような人を。」

思ったことを率直に聞きました。すると、伸兄さんは何かを思い出
すような表情で私を真っ直ぐ見てこう言ったんです。

「……お前らが俺達に似てた、だから無視できなかつた」

「似てた……？」

「ああ……。随分昔の話になるけどな。俺達はサークルみたいなモノ
に入ってたんだ。その時落ち込んでた俺にとっては大切な居場所
だったんだけど……」

「伸太郎は居場所を奪われたのよ、途中でサークルに入ってきた女に
嵌められてね。サークルメンバーも長く過ごした伸太郎じゃなくて、
その女の方を信じた。伸太郎の意見も、明らかに可笑しい点すらも確
認せず」

「んで、袋叩きにされた。そのサークルは何でも屋みたいな感じで荒
事も解決したりしてきて、力が常人以上にあつた。その時は今みたい
に体力が無かつたからされるがままで。紅茶ぶっかけられたり、鳩尾
を蹴られたり……まあ、色々されてボロボロになって路地裏に捨て
られて」

「私もその時は事情があつて伸太郎を支えることが出来ないから伸太
郎の妹ちゃんに事情を伝えて……」

「本当に最悪だった、痛いし、ショックだし、情けなかった……」
「そんな……！」

正直、絶句しましたよ。あんな経験をした人が彼の他にもいたんだと、そんな最低なことを出来る人間がああ転校生以外にもいたのかと。

☆☆☆

「ちよつと待つてくれ。」

「何ですか？」

「えつと、伸太郎君？おれ、そんな話聞いたことないんだけど？」

「当たり前だ、言つてないからな」

「そうじゃなくて……」

「質問なら後で答えてやる。今は優子の話を聞け。」

「……そうだね。ごめんね、邪魔して。続けてもらってもいいかい？」

「あ、はい。大丈夫です」

「では、続けますね。」

☆☆☆

「だからさ、俺とはある案件を速急に終わらせてアイツらと縁を完全に切った。金輪際関わりたく無かったからな」

「復讐も考えたんだけど、あの連中の為に時間削つてやるのもバカらしいでしょ？だから関わらないようにここにやり住んだの。」

「……明久君も、同じなんです。少し前に転校してきた男子生徒がいて、ソイツは明久君を苛めて……でもっ！明久君は優しいから、我慢して……！明るく振る舞つてたのに、今日、嵌められて！明久君がアイツを苛めた事になって……、皆明久君の話を聞かないし、信じないしで！」

遂には集団で暴力振るい始めて……、あたし、何も出来なくてっ！」

支離滅裂なその説明を二人は最後まで一切笑わず、真剣に聞いて理解しようとしてくれました。そして、泣き出してしまった私を励ましてくれたんです。『何もできなかつたわけじゃない』『俺たちを頼れ』って。

・・・変な話ですよ、会ってまだ数分なのにこんなことを話して、しかも安心してている。

そこまで話したあと、私は疲れて眠ってしまつたようです。なので、記憶があるのは次の日の朝からです。

保護してもらつた翌日はあたしの家に連絡と明久君の家に事情や彼の状態を伝えたり、ガーゼ等の買い出しをしたりしました。

2日目は、私は貴音お姉さんについてきてもらつて、1度自宅に戻つて事のあらましを改めて両親と秀吉に説明しました。そして、お世話になつている人のことも。両親と貴音お姉さんが話すときは私たちは追い出されましたけど、話が終つたとき両親が安心しきつた表情をしていたのは良い思い出です。

3日目は私の両親と伸兄さん、そして明久君のご両親達と連絡を取り、今後どうするかとかを話し合つてました。そこで、しばらく伸兄さん達と過ごすことが決まりました。

やるべきことが大体ひと段落した4日目の朝、明久君が目覚めました。怪我の度合いが酷かつたので伸兄さんは1週間は寝込むだろうと予想してたんでもものすごくビックリしてました。

「ここまでが、明久君が寝込んでいた間の話です。」

☆☆☆☆

「これが、私達がここで過ごすことになつた経緯です。」

「目が覚めた後は、治療に専念しながら、僕が置かれている状況を説明してもらつたりして、伸兄さん達とひと月過ごしました。」

「そして、ついこの間機会があつて伸太郎さん、貴音さん、桃さん達をお兄さん、お姉さん呼びさせてもらうことになりました」

「だいぶザツクリですが、これが僕達の身に起こったことです」
「……………」

言葉を失うとは今この時の為にあるんじゃないかと、名取は何処か頭の隅で考えた。あまりに悲劇的で聞いた誰もが憐れむような、悲しくなるような話だ。

彼を傷つけた転校生はものすごく自分本意な悪意を持っていたし、彼とこれまで信頼を築いてきたであろう彼らは本当の事を知らないまま彼を切り捨てた……………。

唯一の救いと言えば、自分の友人たちが彼らのSOSに気付いて、こうやって過ごしていることだ。そんな目に遭った彼に、彼らに、咄嗟に掛ける言葉が見つからない。

「名取さん？」

「……………すまない。軽々しく触れるべきでは無かったね、きつと思いだしたくもないことだろうに……………」

「いえ、いいんです。今は僕らも落ち着いてますし、何より名取さんに話すと決めたのは他ならぬ僕達です。だから、名取さんが気にするようない事ではないですよ」

「そうか……………」

ぎこちなく笑う少年に名取はそれしか言えなかった。

「……………もうこんな時間か。」

そう言つて、ふつと顔をあげた伸太郎が伸びをする。その声に促されるように時計を見ると6時を回り、窓から見える空はほんの少し色を濃くしていた。

「夕飯作るか……………、貴音は配信してるはずだからおにぎりでも差し入れてやるか。名取、折角だしお前は食ってけ。」

「え……………？」

「この人数だ。1人や2人増えても変わらん、それにもうすぐ……………」

「ただいま〜！お兄ちゃん！」

「ほら来た。」

「見慣れない靴があつたけど、誰か来てるの〜？つて、名取さん!!？」
「や、桃さん。お邪魔してるよ」

「いえいえ！どうぞ、ごゆつくり!!」

「ここ、俺の家なんだが。あと桃、お前はちゃんと家に帰れよ・・・」
「えー！いいじゃん！ちゃんと説明してここに來てるし！家にいてもお父さんとお母さんのラブラブ見せ付けられるだけで暇なんだから！」

「・・・それならしょうがない、か？」

「うん、しょうがないの！だからお兄ちゃん、今日のご飯は唐揚げがいない！」

「だからに繋がってないぞ。別にいいけど」

「あ、兄さん、手伝うよ」

「お、サンキュー、明久」

さつきまでの空気が嘘のように明るくなる。明久、優子、秀吉に笑顔が灯る。

最初は切り替え切れなかつた名取だが、明久達の自然な笑顔や楽しそうな雰囲気を見て少しずつ、表情を弛めるのであった。

（後で伸太郎君にはお話をしないとな）

ちなみに、しっかりと途中の気になる発言について問い詰める気満々である。

「（ん？寒気が・・・）」

キッチンで不穏な気配を感じ取った伸太郎が、肩を震わせたのを彼は知るよしもない・・・。

『しんたろうのはなし Ⅰ』

案の定というべきか、食事が終わったあと、伸太郎は名取に問い詰められていた。

「それで、伸太郎君？さっきの話、詳しく」

「言ってなかったっけ？」

「少なくとも、おれの記憶ではないかな」

「んー、まあいいか。」

伸太郎は少し悩む素振りを見せたが、話すことにしたようだ。

「前に、俺の力のことは話したよな？」

「ああ……。確か、元は薊さんっていうメデューサの能力で、幾つかの種類があるんだっけ？」

「そうだ。付け足すならその力が怪異のものだから、俺は霊や妖怪を式やまどろっこしい儀式を介さずとも祓えるし、他の人間より濃くハッキリと奴らの世界が見える」

「ここまででは知ってるよ。問題は、君が明久のような目に遭った事があるということだ。おれと君は小学校から友人だったのだから、そんなことがあれば知っている筈なんだ」

「まあ、落ち着けよ。それを含めてこれから説明するんだろうが」

「・・・そうだね、少し冷静さを欠いた。すまない、伸太郎君」

「別にいい」

それだけ言うと、気にした風もなく『そもそも』と伸太郎は続ける。

「俺はどこでこの能力を手に入れたと思う？きつかけは？時期は？そんな素振りを名取は1度でも見たことがあるか？」

「いや、ないね……。さらに言うなら君から強力な怪異の気配を感じたこともない。メデューサは神話で語られることもある怪異だ。気付かないなんてあり得ない。」

「お前くらい優秀だったら尚更な。さて、こここの擦り合わせは大丈夫だな。分かっているだろうが名取と出会う以前にメデューサに会ったことはない。名取と出会ったのは小学校低学年。それ以前ともなれば、いくら俺でも親から眼を奪い、外へ出るのは難しい。それ

に、遊びにいくときは必ず父母のどちらかがついてきていた。

だから、変なところやモノには行けたりも触れたりもできないわけだ。能力の譲渡も一朝一夕で出来ることじゃない」

「そうなるよ、君がメデューサから能力を受け継ぐのは不可能だよと言っているように聞こえるけど?」

伸太郎はその言葉にニヤリと口角を上げる。

「そう、不可能なんだよ。俺という人間がチカラを手に入れるのは、でも、思い出せよ、名取。俺がこの能力について初めて話したときのことを」

「……君は、おれと初めて会った時には既に能力を所持していたと言っていた。おれが納得できたのはその時から度々、君が能力の一部を発動したのを見たことがあるから。」

忘れもしないさ、あれは本当に衝撃的だったからね」

自分と同じ年の幼い少年が見たこともない力で怪異たちを退けていく様をきつと忘れることは無いだろう。

「じゃあ、どうやって?」

「簡単さ、この人生で得られなかった。なら最初から受け継いでいたというだけだ」

「最初から……?まっつてくれ、混乱してきた」

「おう、悩め悩め」

頭を抱える名取とは対照的に伸太郎はさも楽しそうに彼を眺める。ちなみにだが、伸太郎たちは書齋で会話をしている。

「そう難しく考えることはない。さつきも言ったが、この人生で、今世で、得られなかったってだけなんだよ。」

「つまり、別の人生で得ていたから、君は生まれる前から能力を持っていたと?」

「That's right! その通り!とは言っても、正確には違うんだけどな……。それを含めて話す。さて、それが分かったところで話を始めよう」

どうやらここまででは本題ではなかったらしい。その証拠に、伸太郎はさつきまでとは違い真剣な表情をしている。

「俺が能力と・・・いや、シンタローが蛇達とその主に出会ったのはこことは違う世界で19歳の時だった」

☆☆☆

それから伸太郎が語ったのは学生時代を共にしてきた名取が知る伸太郎とは全く別物で、まるで空想のような突飛な物語だった。

その世界で、彼はまず父親を喪った。聡明なシンタローは泣くのを我慢し、幼いながら家族を支えねばと周りに嫌われようが学校に通い続けた。

そして中学3年のある日、彼に転機が訪れる。周りに嫌われ、周りを遠ざけてきた彼に構う少女が現れたのだ。彼女がきつかけとなり、シンタローの世界は広がっていった。同年度の冬頃、少女に連れられ、彼女の父が勤める高校の文化祭でシンタローは初めて恋をした。

高校に進学して彼はようやく人並みの幸せを得た。授業の感想を語れる相手、昼を共にする友人。悩みを相談できる先輩。心の底から大切にしたいと思える人。全てが彼にとって初めてのことで、今まで願っても叶わなかったものだった。

シンタローは大切にしたい、態度にこそ出はしなかったが彼なりに精一杯向き合った。不器用だったかもしれない。それでも彼女たちには伝わっていた。

だが、それも長くは続かなかつた。二年生の夏に彼は全てを失ったのだ。大切な人や親友、初めての男友達・・・その全てを。彼は暫くは高校に通ったが、結局退学した。初めて手に入れた温もりを想いを、一気に失い、昔のようになくなってしまったのだ。

それから2年、彼は引きこもった。家族の為に片手間に家計を支えながら、彼女達との想い出を忘れないように、その声を忘れないように、あの暖かな日々を忘れないために。そうして温もりを抱えながら、自分を罰する日々の途中で彼はエネという無二の相棒と出会った。

最初は突き放していたが、シンタローはあることに気付いてエネを強く拒絶することはなくなり、少しずつ、ほんの少しずつ立ち直り始めた。真つ暗闇だった世界が彩られ始めた、2年もの時を経て彼の時間がまた進み出したのだ。

そんなある日のこと。いつものように株や楽曲製作をしているとき、うっかりキーボードにコーラを溢してしまった。あいにく、その時期はお盆。宅配はサービスを休止していた。浸水したキーボードで凌ごうにも『T』『O』『R』しか打てないのでは何も出来ない。シンタローはあまり気にしていなかったが、そうなった一因である電子の妖精は泣きそうになりながら必死に謝った。

シンタローは大切な人間を泣かせたままに出来るわけもなく、おもむろに赤いジャージを羽織り、愛飲する黒い炭酸飲料と財布を持った。彼女のためのスマホと白いイヤホンを耳に当て、少し混乱しているエネを急かして、2年ぶりに家から出た。

じりじりと焦がすような光が差す炎天下の中、彼はようやく泣き止んだ少女に笑いかけながら、目的地のデパートへ足を進めた。到着して、エネと相談しながらPC部品コーナーを物色していると、突如として店のシャッターが降りた。テロリストが身代金交渉の為にシンタローたちを人質にしたのだ。

テロリストの目を盗みながら、シンタローは縄をいつでも脱出できる程度に緩ませていると横から猫目の少年に声を掛けられた。

これが全ての始まりだった。

☆☆☆

「おれの知ってる伸太郎君とは違いすぎて想像がつかないな・・・」

「そりゃあな、俺だってこうなるとは思わなかったさ」

「まあ、そうだよね。・・・ところで、今の話に出てきた大切な人ってもしかして?」

「ん? 貴音に決まってるだろ」

「貴音さんもなのかい?」

「ああ、ついでに言えば桃もな。」

「桃さんも!？」

名取はぼかんと口を開けて驚く。彼にとってはそれほど衝撃的だったようだ。

それをスルーして伸太郎は言う。

「とりあえず、今の話がきっかけの大まかな説明な。疑問があったら今のうちに聞いてくれ」

「今のところ特にはないかな、続けてくれ」

名取は先を促した。